

成長マシンとしての都市

City as a Growth Generator

山形浩生

Hiroo Yamagata

翻訳家・評論家／1964年生まれ。東京大学都市工学科およびMIT不動産センター修士課程修了。

著書に『たかがバロウズ本』『新教義主義宣言』ほか。

訳書に『アメリカ大都市の死と生』『21世紀の資本』ほか。

都市が経済成長のプラットフォームであることは、もはや誰も異論はない。それが具体的にどのように実現されるのかについては、議論もある。ひとつは同質のものをたくさん集め、外部性（例えば、その産業に関するノウハウを持った人材のプールやその業種に特化したサポート産業など）の集積を実現することで、その業種の集積がさらに進み、競争が激化して成長が実現されるのだという考え方だ。例えば、シリコンバレーなどがその例だ。それに対して、ジェイン・ジェイコブズが主張したように、都市は多様性があることで成長が促進されるのだという考え方もある。デトロイトなどを見れば、過度の単一用途集積は確かに外的なショックに弱くなるのも間違いない。実際には、単純な機能集積ではなく、それがどんな企業構造で実現されているのか、その集積のなかでの情報の流通がどうなっているのか、といった細かい仕組みが成長を左右するようだ。

結局のところ、人は何が商品や事業として成功するのかよくわからない。いち早くトレンドをとらえたから、特殊なビジョンや天才的な慧眼を持っていたから、といった後づけの説明は可能だけれど、たいがいそれは再現不能だ。成功し、成長する産業を生み出すためには、とにかくさまざまな要素の新しい組み合わせを試し、それを市場に出してフィードバックをもらって、また次の組み合わせを……というイタレーションを繰り返すことになる。

成功した組み合わせには人が群がり、先鋭化する一方で改良の余地は急激に下がる。そのとき、他の新しい組み合わせができるか——技術の組み合わせでも、人の組み合わせでも——それが成長を続けられるかどうかのポイントとなる。

もちろんその組み合わせは完全にランダムではない。可能性は無限にあるので、完全にランダムでは発散するばかり

だ。ある程度の集中を通じ、組み合わせが相互に強化するような仕組みは要る。でも実際には、あらゆるところであらゆる組み合わせが実現できるわけではない。そこにある資源、人、各種制度や偶然から自ずと枠はできる。

大きな枠組みを与えつつ、そのなかで最大限にランダムな組み合わせができるようにする——それが成長における都市の重要な役割となる。そして、それはある程度は人工的につくり出せるようだ。ぼくが都市工学を勉強していたころ、人工都市は失敗の連続だった。つくば学園都市やブラジリアやチャンディガールは人工的で殺伐として活気がないと罵倒の対象だったし、ニュータウンも非人間的で自殺や殺人鬼製造マシンと揶揄されることも多かった。でもその後、ドバイができ、バンガロールができて、さらには深圳を筆頭に中国の人工的な大都市が急激に生まれ、しかもそれが（当初は殺風景ながら）10年ほどで、それぞれ成長とイノベーションの一大拠点となった。

それはある程度は偶然の産物だ。なぜバンガロールでソフト産業が立ち上がり、深圳で電子ハードウェアが優位となったのかは、それぞれの歴史的背景がある。それがその都市の大きな枠組みを提供したはずだ。でもそれをテコに、なぜそれぞれが発展できたか——そこにはおそらく都市が持つ、人間に対する物理的な制約力がある。人々をどうつながらせ、さまざまな活動の新しいランダムな組み合わせをどう可能にするか、そしてその組み合わせの成果をどのように提供してフィードバックを得るか——そこには、制度や規制面と同時に、都市の物理的な環境がある。もちろん、何が新しい組み合わせを可能にするかは、ときにはインフラだったり、ときには学校だったり、ときには酒場だったり、それ自体がまた後づけでしか説明できないことも多いのだけれど、でも、そうしたランダムな組み合わせが継続的に発生するこ

とで、成長の種も継続的に生まれ、ときには大ヒットにつながる。

さて、この状況が各種の新技术で変わりつつある。それが都市のあり方を変えるだろう。都市は、物理的な実体を通じて人の動きをコントロールする。でも今、人を動かす新しい方法ができつつある。それが情報だ。ぼくたちは今都市で、奇妙な現象を見ている。実際の物理的な外界を見ず、ひたすらスマホやタブレットを見ている人々だ。旅行先でも、人は情報機器から出てくる情報だけにひたすら反応している。現実の世界は、その情報の確認手段でしかなくなっている。

当初、情報装置、特にインターネットについては、人々がもっと広い情報との出会いをもたらし、それを通じたランダムな組み合わせの拡大を目指すものだった。でも実際にはそうっていない。人はむしろ情報機器にコントロールされるようになりつつある。自動運転の導入で人はほとんどドアツードアの移動すべてを情報インフラにコントロールされ、そしていずれコントロールされているという自覚すらなくなる。あっても、むしろそのコントロールに安心感を覚えるようにすらなるだろう。そのなかで、ランダムな組み合わせの可能性は大きく縮小されかねない。

もちろん一方でこれは、新しい可能性をもたらす。都市はひとつには物理的な建築物を通じて人々の行動をコントロールする装置だ。でもそこにインフラ構築を伴わない、新しい情報を使った人間のコントロールが本格的に行われるようになる。さらにVRやARは、かなり実用に近づき、場合によっては現実にかかわれる可能性すらある。物や建物すら要らない。その映像さえあれば、人はコントロールできてしまう。それは、都市の効率性を上げる。が、その代償はひょっとして、新しい組み合わせの可能性——ひいては成長——を削ぐことなのかもしれない。

が、それに代わる可能性もある。人工知能の経済的影響についてひとり気を吐く経済学者の井上智洋は、いずれ人間に代わって人工知能がイノベーションを行う可能性を述

べている。人間はヒト優位主義に冒されているから、高度な意志決定や芸術的な創造は人間しかできないと思っている。でもそうした決定や創造は、無数の組み合わせで代替できる部分も多い。それなら、人工知能(いや知能なんかななくても総当たり方式のコンピュータ)の方が優位だ。今のイノベーションは、人間のPDCAサイクルが持つ生理的限界にある程度制約されるけれど、コンピュータにはそんな制約はない。今、イノベーションを通じた生産性上昇は年率1パーセントくらい。が、それが人工知能でできるなら、年に数十パーセントも上昇する可能性もある。

そのとき、人間の「創造性」は次第に劣勢となる。そして人間の役割は変わる。人間の最大の役割は無数の組み合わせのなかから「価値」あるものを拾い出すこと——つまり消費することとなるかもしれない。人は、人工知能がつくり出した組み合わせに対し、消費を通じて価値づけを行う。価値は、それがつくられたときに生み出されるのではない。人がそれを価値あるものと見なして選んだときに生じるのだから。

これはまったく違った世界にも思える一方で、実は今とそんなに変わらないのかもしれない。今すでに、人は消費を通じて己のアイデンティティを確認している部分が大いにある。人はその消費の成果を、SNSに取り込み共有し、それがAIによる新しい生産の組み合わせに利用され——

そのとき都市は、生産のための無数の組み合わせが生まれる成長の場ではなくなるだろう。むしろそれはショールームの一種となる。今、成長マシーンとしてとらえられている都市は、どちらかと言えば生産の場として評価されているのだけれど(シリコンバレーも深圳も、消費地ではあってもむしろ生産的な役割により重視されている)、消費の場としての都市の重要性が、今後拡大するのかもしれない。その物理的形態は——いや、もうそこでは物理的形態自体が、VRやARのもたらすレイヤーによりあまり意味のないものとなっているのかもしれない。